

TILE BEAUTY IN EVERYDAY CRAFT.

何年経っても変わらない「無名性の美」

「用の美」を唱えた柳宗悦の民藝には、もうひとつ「無名性の美」という視点がある。民衆の、民衆による、民衆のための工芸。特別な作家ではなく、無名の職人によってつくられたものに、美の価値を見出すものだった。さらに民藝には、複数性—民衆の要求に応えるために数多くつくられたもの、廉価性—誰もが買い求められる程に値段が安いもの、労働性—くり返しの労働によって得られる熟練した技術をともなうものといった特性があり、民衆の暮らしから生ま

れた手仕事の文化を正しく守り育てることが、生活をより豊かにするのだと主張している。言わずもがな、タイルは無名の職人によりつくられる建材。一片一片に装飾性はないが、無数のピースを組み合わせることで限りない美を創造する。たとえば、ビルの外壁に施されたタイルは、何年経っても変わることのない美を表し、街に自然に溶け込む景観となる。タイルの無名性が創造するのは、無心の美や自然の美、健康な美なのだ。



作家性のある鑑賞品とは異なり、建物の一部を形成するタイルが醸す無名性の美。経年劣化しない特性により美しさを保ち続ける